

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第六十九回）

つくし か だん

## 「筑紫歌壇」

〈1〉古代、九州全体を総管するのみならず、日本の西にあつて外敵から日本の国土を守る「国防」を初め「外交」、「貿易」の拠点となっていた役所「大宰府」に有名な万葉歌人「大伴旅人」がださいのそち大宰帥（大宰府の長官）として着任したのが奈良時代の初めの神亀四（727）年末か翌年春頃と云われている。

〈2〉大宰府に大伴旅人が在任中の数年間中に筑前国守（筑前国の役所の長官）・山上憶良、大宰少弐（長官の補佐）・

おののおゆめ

さみまんせい

小野老、造観世音寺別当・沙弥満誓、などの著名な万葉歌人が会し、「万葉集」に収められた数々の歌を詠んでいる。それを後の人に「筑紫歌壇」とも称されることになる。

〈3〉都から大宰府へ下向した大伴旅人はこれら万葉歌人たちと親交を深め、酒を酌み交わし、歌を詠みあつたとみられる歌が「万葉集」に収められている。

〈4〉次の歌（巻三―351）は当時、造築中だった観世音寺の別当（ここでは造築を監督する僧侶であった。）で大伴旅人との交流の深かったと云われる沙弥満誓と詠みあつた歌であろうとの説がある一首である。

よのなか

なに

たと

# （1）世間を 何に譬へむ

あさびら

こい

朝開き 漕ぎ去にし船

あと

の 跡なきがごと

巻三―351 作者…沙弥満誓

（解説）世の中を何に譬えたらよいのだろうか。それは朝早く港を漕いで出て行った船が、跡に何も残さないように、はかないものだ。

（註）「朝開き」―船が早朝の港をおし開くように船出すること。「跡なきがごと」―航跡がすぐ消え失せることをいう。

\*この歌は自問自答の形で、この世の常なきさまを詠んだ歌

であろうといわれる説が多いが、次の大伴旅人が大宰府の宴席で公表されたものであろうとも云われる有名な歌「酒を讃（ほ）むる歌十三首」の一首（巻三―347）などを承けて歌ったものとの説もある。

よのなか

たの

## （2）世間の 遊びの道に 樂 しきは 酔ひ泣きするに あるべかるらし

巻三―347 作者…大伴旅人

（解説）この世の中の色々な遊びの中で一番楽しいことは、  
一も二もなく酔い泣きすることのようだ。

○前記（2）歌の作者である大宰帥・大伴旅人の「酒を讃（ほ）むる歌十三首」の一首を承けて歌ったものとの説がある  
前記（1）の歌（巻三―351）の作者・沙弥満誓は奈良時代前期の僧で日本との関わりの深かった朝鮮半島南西部を占めた古代国家・百濟救援のため西下したが筑紫の朝倉宮（現・福岡県朝倉市）で崩御した母・斉明天皇の菩提

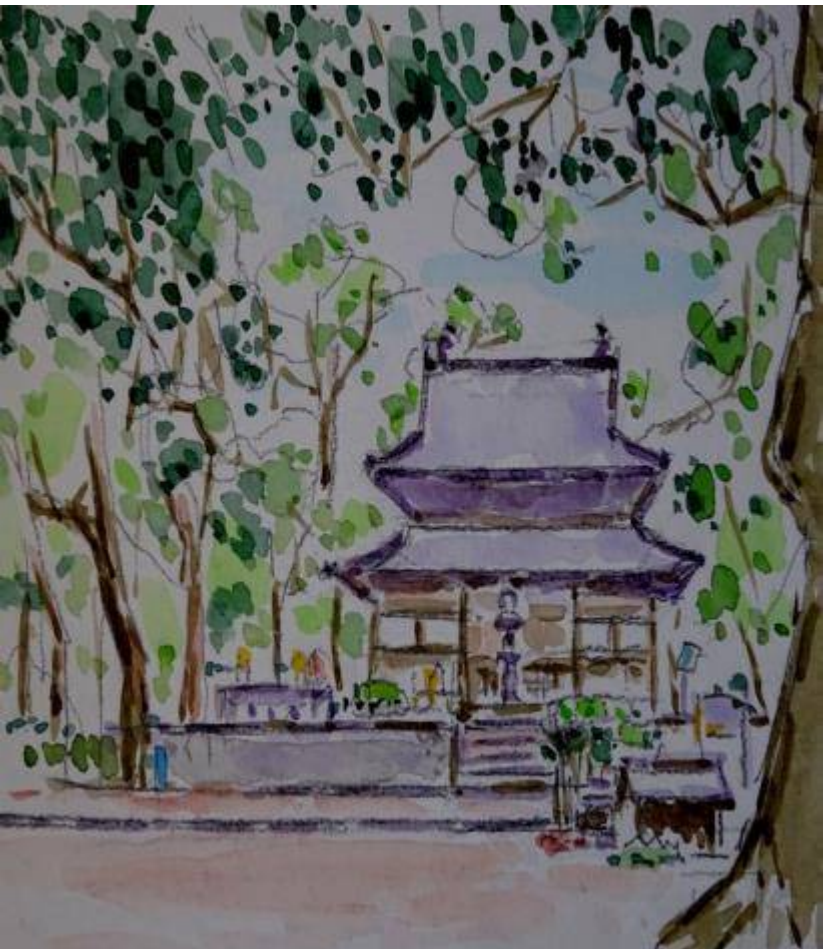
を弔うために天智天皇が発願し天平十八（746）年に大宰府政庁の東に接して創建された筑紫の観世音寺の別当（造営の長官）として養老七（723）年に招かれ造営の指揮にあたったとされる。

（参考文献）・新潮日本古典集成、太宰府観光協会「だざいふ史跡探訪」など

（写生地）大樹に囲まれた観世音寺講堂（本堂）を描く。

創建時の建物は暴風雨、大火などで何回か大破・焼失し、現在の建物は江戸時代に再建された。

（杏 花）



（所在地）福岡県太宰府市観世音寺5丁目6-1